

グローバル化時代の人材育成と多文化的想像力

——トランスナショナルアイデンティティの構築に向けて——

亀山 郁夫（東京外国語大学長）



はじめに 地図を見るところ

本日は「多文化社会実践研究・全国フォーラム」の第5回に多数ご参集いただき誠にありがとうございます。まず「グローバル化時代の人材育成と多文化的想像力」と題して、私の方から20分ほど基調講演をさせていただきます。「トランスナショナルアイデンティティの構築に向けて」という副題が入っておりますが、これは、3.11以降私自身が考えていることをいくつか、現在の国立大学をめぐるさまざまな環境、状況とのかかわりの中で論じていきたいと思っているからです。

今年は、私たち全員が認識しているように、3.11という非常に痛ましい大震災のあった悲劇的な年ですが、2011年という年は同時に、ソ連崩壊から20年にも当たります。ソビエト社会というのは、まさに多文化、多言語社会そのもので、そこは言語レベルで言えばロシア語というスタンダードな言語が支配し、その下に多民族の世界が構築されるという国家構成になっています。2011年は、それが崩壊してから20年という、非常に歴史的な節目に当たる年でもあります。

たまたま先週、この12月末にNHKのBS-hiで、ソビエト崩壊20年の歴史を振り返る8本ほどの番組を再放送されるのにあたり、その解説者を依頼され、その予習としてすべてのビデオを見ていたとき、私には感じたことがありました。皆さんの中にもご覧になった方がいらっしゃるかもしれませんが、そのシリーズの中には『小さき人々の記録』という、100分を超えるドキュメンタリー番組がありました。これはベラルーシに住む、スベトラーナ・アレクシェービッチというドキュメンタリー作家が、まさにソ連という巨大な国家権力の下で生き、犠牲となってきた人々について書いてきた記録を、100分を超えるドキュメンタリーに仕立てたものです。その最後が、チェルノブイリの原発をめぐるドキュメンタリーだったのですが、それは、このチェルノブイリ事故のときに献身的な働きを見せたさまざまな人々、そしてその犠牲となった人々の声を伝える、非常に胸苦しくなるような番組でした。タイトルの『小さき人々の記録』にある「小さき」という言葉には、巨大な国家の犠牲となって生きる、決して小さくはない、小さいながらも大きな犠牲を払った人々の記録という意味が込められています。12月に再度、再放送されますので、ぜひご覧いただければと思います。

このアレクシェービッチさんは、小さき人々の記録をつづるにあたり、彼女自身もまた小さき人々ののだという深い自覚の下に、このドキュメンタリーを作っています。その意味において、この番組はある種の正統性というか、オーセンティシティーというべきものが保証されていることとなります。その理由は、このアレクシェービッチさん自身がチェルノブイリのすぐそばの町で生まれ育ったとい

う過去があるからです。実は、私はこの番組の予習をしながら、自分自身が必ずしもチェルノブイリという場所の位置をしっかりと把握していなかったということに気付かされました。チェルノブイリはウクライナ共和国の北の果てにあります。むしろ被害の多くが北にあるベラルーシに降りかかり、広島原爆の数百倍の放射能がベラルーシ国内に降りそそいだといわれるぐらいの悲劇を負った国です。

このとき、私はその地図を見ながら、3.11以降の私たち全員が地図を見るという行為を連想していました。とりわけ東北地方、あるいは北関東の地図をしっかりと見て、常にその場所と自分自身の住んでいる空間との距離を測っていた姿を思い浮かべたのです。そこには非常に複雑な、原発事故の起こった地点よりもできるだけ遠ければよいという、ある種エゴイスティックな思いがあると同時に、自分自身が同じ地域の上にあるという、難しい言葉になりますが、恐怖の精神とでも言うべきものがあるわけで、したがってそれはそれらの思いを自分自身の中にしっかりと持ちながら地図を眺めるという行為であったと言えます。

国立大学の機能強化（「国民の約束」）について

3.11以降日本は劇的に変わりました。そうした流れの中で、いったい国立大学は何ができるのか、何が問われることとなり、まさにセンター長の言葉にもあったとおり、この難題を引き受ける重要な拠点として大学はあらねばなりません。現在、国立大学協会には86の国立大学法人が参加しておりますが、今回の大震災を受けて、国立大学の機能強化と称して、こういった状況の中で、いったい国立大学は何ができるのかというテーマが発表されました。それを「国民への約束」という副題の下に発表しているわけですが、そこで考えられている3つの使命としては、まず何よりも、ナショナルセンター機能の徹底的強化があります。次に、リージョナルセンター機能の抜本的強化。そして3つ目に、有機的な連携共同システムとしての機能強化があげられました。

このナショナルセンターとしての役割ですが、例えば東京外国語大学という大学の成長を考える上で、26の専攻言語を持ち、世界諸地域と文化、あるいは言語を教育研究するセンターとしての機能を果たすべきであるということにはそれなりの意味があります。ほかの多くの国立大学と差別化するためにも、ある意味で自らのアイデンティティーの確認に困るということはありません。しかしそれは逆に、そういった性格上、ならばリージョナルセンターとしての機能の抜本的強化といった場合、当然のことながら我々東京外国語大学にとってのリージョンとはいったい何なのかという問題が浮かび上がってくることであります。

私が思うに、少し口幅ったいですが、新しいリージョンとして我々がまずイメージしているのは、世界の諸地域であるとまずは大きく胸を張っていきたいところです。それと同時に、我々にとってのリージョンとは、日本の国内でもあり、日本の国内のさまざまな地域に共同体、コミュニティを築いている人たちの、そのコミュニティの存在も我々にとってのリージョンなのです。このように考えると、本学の場合は、リージョンの概念そのものを逆に変えてしまうという関係性にこそ大学の性格があるということを感じ知らされます。

このリージョナルセンターとしての機能を抜本的に強化し、その役割を担っていくのが、東京外国語大学ではまさにこの多言語・多文化教育研究センターです。そして、その中心的なプロジェクトとして多文化社会実践研究・全国フォーラムがあるのだと我々は理解しています。これが果たして国のどれほどの理解を得ているのかと言えば、それは今回このセンターの概算要求が通って2期目に入ったというところに、その理解の一端が示されると理解し、安心しております。

3.11 以降における本学の役割

さて、現在我々がよく口にする言葉に、グローバル人材の育成というものがあります。そこには私
の目から見ると若干近視眼的だと思われる側面もありますが、とにもかくにも世界のさまざまな舞台
で活躍できる人材の育成ということが言われ、例えば平成 20 年度の概算要求の内容を見ても、9 月
末に財務省に上がった内容を見ても、大学教育のグローバル化のための体制整備という大きな項目の
下に、グローバル人材育成推進事業、グローバル 30 プラスがあります。このグローバル 30 は、現
在 13 の大学が拠点大学として認定され、外国人留学生の受け入れの拠点となっています。主として
理系の大学が多いのですが、そのグローバル人材育成推進事業はかなり大ざっぱなものであるとい
う批判もあり、よりきめの細かな支援事業を展開しようというところから、グローバル 30 プラスと、
プラスがつけられました。

この支援事業の可否基準の中に、外国人留学生の受入数が指標として入っています。つまり、この
人材育成事業とはそうした学生を対象にして認定されているわけで、そのあたりを見ると、文部科学
省のまなざしが、必ずしも、我々が展開しようとしている日本国内における外国人のコミュニティー
との連環性にしっかり届いていないことを思わせます。

今回、3.11 以降東京外国語大学が行った社会貢献の 1 つの大きな柱として、多言語災害情報支援
サイトがあったことはご存じだと思います。実際どの場にあっても、私はこの災害情報支援サイトの
実績を褒められました。もちろん多くの人がテレビ等々で知ったわけですが、現実はこの事業とい
うのは、東京外国語大学が初めて、世界に向けて常に情報を発信するという使命を現実的な形でなし得
た唯一の事例ではないかと思われまます。つい最近届けられた平成 22 年度業務実績に関する評価結果
においても、東京外国語大学の事業として唯一、特記事項として評価されたのがこの項目でした。こ
れがいかに社会に与えたインパクトが大きかったかということをお話していると思います。

全地球をカバーする地域研究のための教育拠点化（学部改編の意味）

さて、こうしたグローバル人材の育成というものをよりリアルな意味においてとらえ、そしてそれ
を社会貢献の事業と結び付け、またその中に人材育成の目標を立てるという多言語・多文化教育研究
センターの理念を、われわれは来年の 4 月から立ち上がる新しい学部再編の中においてもしっかりと
位置付けることができました。これは大変大きな意味合いを持つものであると考えております。

ご存じのように東京外国語大学は、現在 26 の専攻語による外国語学部単体の形から、来年の 4 月
からは言語文化学部と国際社会学部の 2 つの学部によって再スタートを切ることになります。この言
語文化学部の中には、これまで世界の第 1 言語話者人口としては第 6 位を占める、南アジアの東イン
ド地区にあるバングラデシュから東インドにかけて話されているベンガル語を設置することになりま
した。この 2 学部化の議論では、その始まりから、全地球をカバーする地域研究のための教育拠点化
という大きな理想があったのです。

ただし、この 2 つの学部にしても、世界教養プログラムという、一国際教養人、一国際職業人とし
て生きていく上で必要な教養を身につけるための共通の教養教育課程を持っています。その中にはも
ちろん言語や地域に関する知識、あるいは世界に関する知識など、今申し上げたような国際人として
生きるためのさまざまな基本的な基礎教養が含まれているわけですが、それに我々は世界教養と名付
けました。ここにあるのは、あくまでも多言語・多文化性に立脚しようという我々の覚悟です。現在、
国際教養という言葉が非常に人気を博し、受験生の価値もそちらに向きがちですが、その基本にある
のは、英語というグローバルスタンダードによってボーダー、すなわち境界を乗り越え、そこで何か

を結んでいこうという英語一元主義的な発想です。しかし国立大学である東京外国語大学がその立場を取ることは許されません。というのも、まさに多言語・多文化性というものを自らのアイデンティティとし、それを追求することが、国大協が掲げている機能強化そのものだからです。だからこそまさにベンガル語を開設することもあえて行うわけです。

その多言語・多文化性に立脚し、なおかつそれを国内のさまざまな領域で活躍できる人材を育成する目的で創設されたのが、言語文化学部の中のグローバルコミュニケーションコースです。グローバルコミュニケーションコースは、英語教育学、日本語教育学、言語教育学、すなわち言葉を教える人材を養成する言語教育学部門と、言葉や文化を通して人と社会をつなぐコミュニケーション部門から成り立っています。その中に含まれるのが、同時通訳の育成や、今日の課題でもあるコミュニティー通訳の育成、さらに多文化社会コーディネーターの育成です。つまりこの3つの人材育成のコアカリキュラムを本学はこのたびの改編で設置できたわけです。

その趣旨のひとつに、「グローバル化に伴い、言語や文化の違いを超えて事業を推進していくことは企業や行政や学校などこの組織においても不可欠となり、そのために多様な人々との対話、共感、実践を引き出すための空間を構築、展開、推進できる多文化社会コーディネート能力を備えた人材の必要性が高まってきている。ここではその基礎を学ぶ。」と書かれています。過去5年、ないしは6年にわたる多言語・多文化における実践がこうした形で教育カリキュラムとして結晶したというのは、大変喜ばしいことです。

トランスナショナルアイデンティティの構築に向けて（東北→NY→北京）

最後に、私が先ほど申し上げた3.11以降考えているあることについて、多少時間をいただいて話をさせていただきたいと思います。私は、7月9日から10日にかけて、1,300キロの行程を車で、三陸海岸から福島県の海岸沿いを見てきました。見るができなかった地域は、女川と宮古の2つの町だけです。ほかの町はすべて回ってきました。そして、その間、感じたことが2つありました。これから申し上げる私1人の人間としての発言は、ことによると不謹慎な発言になるかもしれませんが、その現場でまず経験した1つの感覚は、圧倒的な荘厳さでもいいでしょうか、自分自身が自然の本体、あるいは運命の本体とまさに1対1でぶつかり合っているというものでした。このある種神秘的な感覚は今もって忘れることができず、いったいこれを何に例えてよいのかといったところで自分自身迷いがあるほどです。これがまず1つでした。

そしてもう1つは、自分自身が世界を見るということ、すなわち参観、現場を見るということに対して湧き出る激しい罪の意識です。私自身は車で回ったのですが、釜石に入った途端にその車から出ることができなくなってしまいました。つまり、それを見るということそのものの中に罪の意識が宿ったのです。この罪の意識が宿るということは、ことによると多くの人がある現場で経験したことではないかと思います。その罪の意識とは、自分自身がある優越者の立場に立っているという揺るぎない事実で、私はそれが自分の意識の中に波紋として押し広がっていくのを認識していました。それは荘厳な感覚であると同時に激しい罪の意識でした。

7月9日から10日にかけて、その2つの経験を持って私は東京へ戻り、その1カ月後に、今度はニューヨークのマンハッタンを訪問しました。コロンビア大学へは所用があって行ったのですが、9.11の現場であるグラウンド・ゼロを私は二度訪ねることとなりました。私はてっきりそのときにも、東北で経験したある種の荘厳な印象、そして見ることの罪の意識といった、何やらある絶対的な状況から生まれてくる激しい働き掛けというものを、やはりグラウンド・ゼロからも受け取ることを期待していたのですが、実はグラウンド・ゼロに立ったそのとき、私は何も感じるができなかったのです。

その理由を考えたとき、私はまさにこの東北大震災の場合は、言葉は大げさですが、自分自身の中にあるナショナルな意識というものが決定的に傷ついているのだということを感じました。というのも、私はグラウンド・ゼロを見ながら、自分たちは何と不幸なのだろうか、日本は何と不幸なのだろうかということをはたすら思っていたからです。すなわち私がこのグラウンド・ゼロ、つまりマンハッタンで経験したものは、どれほどこのマンハッタンが悲劇的な現実だったにせよ、結局は私自身は当事者ではなかったのだという意識でした。

しかし同時に、この当事者であるということ、当事者になったという意識を自分自身が持つということは、先ほど申し上げたように、自分自身の中にあるナショナルな意識を刺激されたということでもありました。しかし、その次の瞬間、そのナショナルな意識を持ちながら、何と日本は不幸なのだろうかと思うことは、果たして無条件に肯定されるべき心情なのかと考えたとき、いや、決してそうではないのではないかとも思いました。つまり、そうしたナショナルなものを超えて世界の苦しみに共感できる感情というもの、あるいはセンチメントといったものをしっかりと持つ人間こそが、グローバル化時代だからこそ育てられねばならないと思ったわけです。

そのグラウンド・ゼロの訪問から1カ月後の9月初旬、私は、創立70周年の祝典に出席するために、北京外国語大学を訪れました。北京外国語大学は、ある意味で東京外国語大学を模倣する形でつくられた大学なので、言葉は大げさですが、弟分の大学を見に行こうぐらいの気安い気持ちで訪れました。しかし、現実を見れば、70年間北京外国語大学が果たしてきた役割は、まさに国立大学としての機能文化の最先端をいっているという思いを抱きました。しかも今の我々の大学は、必ずしもそれと同様の方向性をしっかりと持ってはいません。それにもかかわらず、われわれに対してまさに右上がりの幻想を持ち、北京外国語大学は拡大しつつある、その事実を私は否定できなかったのです。

しかし、その懇親会の席上で多くの日本語研究者や日本文化研究者など、北京ばかりでなく中国全国のさまざまな地域で日本語を勉強したり日本文化を学んだりしてきた人たちと語り合う中で、彼らがいかに日本が経験している不幸に対して心底から、真率な同情心を持っているかということに気付かされました。そのときに私は感じたのです。その中国の人が、もしも日本が経験している不幸というものに対して、自分自身のナショナルリティーを超えて、深く共感しているとするならば、そこにあるのはまさにトランスナショナルなアイデンティティではないかと。しかも、それは日本語、あるいは日本文化を深く学ぶという長い蓄積を通して生まれてきた、非常に大事な、グローバルな、グローバル化時代にあるべきトランスナショナルな、アイデンティティ、いえ、それはもうヒューマニズムとでも言った方がよいのかもしれませんが。私が抱いた思いはそういうものでした。つまり、言語や文化を学ぶという中には、ナショナルなものを超えて共感できる、そうした極めて大事な情念というものを育てる要素があるのだということです。

おわりに 行動を選ぶ——「共苦」の二つの精神

最後にあるフレーズを引用したいと思います。それは、「彼らの苦しみが存在するその同じ地図の上に我々の特権が存在する」という一言です。これはアメリカの批評家のスーザン・ソントグという人が書いたある文章の、『他者の苦痛へのまなざし』という、私の大変好きな本の中に記された1行です。これはまさに、先ほど最初の地図を見るという行為、すなわち他者の不幸に対してある意味で絶対的な優位に立ち、そしてなおかつ、それゆえの罪の意識を感じるという自分たちの特権のことです。その思いがスーザン・ソントグのこの1行にしっかりと刻み込まれているということから、ここに引用させていただきました。

では、我々はこの特権をそのままにしておいていいのか、その特権の上の安住で済ましていいのか。

これは、言葉を換えれば、その特権を意識すること自体の中から、いったい何が生まれてくるべきなのかという問題です。もちろん静かに瞑想的に他者の苦しみに思いをはせるという受動的な態度もあるでしょう。それもある意味では優れた1つの共苦の態度であろうかと思えます。しかし、現実にも求められているのは決してそんなことではなく、まさに行動を選ぶということ、これが求められている、今の私が強く感じていることはそれです。

私自身も、3.11以降非常に強い幻滅の中で過ごしてきました。その思いを克服すべく、7月9日、10日にかけて1,300キロの旅に出たわけで、それも私にとっては1つの大きな行動でした。そして今日ここでお話をしたことは、まさにそこから始まった私自身の一連の考えです。話が少し抽象的になったかもしれませんが、これをもって私の基調講演とさせていただきます。ご清聴ありがとうございます。(拍手)